

◎ 日汉对照世界名著丛书

# 我是猫

吾輩は猫である

夏目漱石

著

□ 中文翻译 / 于雷

□ 编校 / 许昌福

我是猫

吉林人民出版社  
JILIN DAXUE CHUBANSHE

日汉对照世界名著丛书

# 我是猫

原 著 夏目漱石  
中文翻译 于 雷  
编 校 许昌福

吉林大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

我是猫/(日)夏目漱石著;于雷译. —长春:吉林大学出版社,  
1998.6(2004年.12重印)

(日汉对照世界名著丛书)

ISBN 7-5601-2370-8

I. 我… II. ①夏…②于… III. 日语—对照读物, 小说  
—日、汉 IV. H369.4: I

中国版本图书馆CIP数据核字(2005)第001184号

日汉对照世界名著丛书

我 是 猫

原 著 夏目漱石

中文翻译 于 雷

编 校 许昌福

---

责任编辑、责任校对: 张显吉

封面设计: 张沅沉

---

吉林大学出版社出版  
(长春市明德路421号)

吉林大学出版社发行  
吉林农业大学印刷厂印刷

---

开本: 850×1168毫米 1/32

2000年5月第1版

印张: 17.125 插页: 4

2004年12月第3次印刷

字数: 645千字

印数: 12 001—17 000册

---

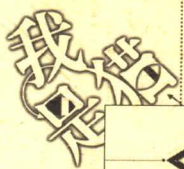
ISBN7-5601-2370-8/I·121

定价: 23.00元

◎ 世界名著丛书

# 我是猫

夏目漱石著



◎ 世界名著丛书

# 包法利夫人

福楼拜著 夫人



◎ 世界名著丛书

# 呼啸山庄

艾米莉·勃朗特著



◎ 世界名著丛书

# 傲慢与偏见

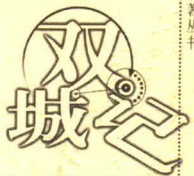
简·奥斯汀著



◎ 世界名著丛书

# 双城记

狄更斯著



日汉对照世界名著丛书

我是猫 ■ 包法利夫人 ■ 呼啸山庄  
傲慢与偏见  
双城记

## 出版者的话

为了提高日语学习者的阅读能力和兴趣，加深对日本语言文化的理解，我们邀请了吉林大学部分日语专家和学者编写了日汉对照世界名著丛书（全译本）第一辑、第二辑。

本辑（第二辑）所选世界名著（《我是猫》、《包法利夫人》、《傲慢与偏见》、《双城记》、《呼啸山庄》），日文采用日本最著名版本，中文采用译林出版社译本，均出自我国著名翻译家之手。因此，所选版本具有权威性。

丛书采用同面相对的日汉对照方式，即日文原文与相应的中文同面对应，这样便于读者参照阅读，在两种语言环境中体会世界名著的魅力。

丛书充分考虑到了日文和中文的不同阅读习惯，在版面安排上，日文、中文均横排；日文排在上，中文排在下，既相互对应，又独立成文。使用文字字体也均采用日文和中文的通用字体。

本辑的出版，得到了日本岩波书店、日本在华日语专家东海林健先生、吉林大学外语学院的部分专家以及江苏译林出版社竺祖慈先生等的支持和帮助，在此一并表示深深的谢意。同时，由于我们的水平和力量所限，不足之处在所难免，敬请读者不吝赐教。

吉林大学出版社

2000年5月

## 吾輩は猫である

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番薄悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始であろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一毛をもって裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで菜缶だ。その後猫にもだいぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。

## 我 是 猫

咱(zá)家是猫。名字嘛……还没有。

哪里出生? 压根儿就搞不清! 只恍惚记得好像在一个阴湿的地方咪咪叫。在那儿, 咱家第一次看见了人。而后来听说, 他是一名寄人篱下的穷学生, 属于人类中最残暴的一伙。相传这名学生常常逮住我们炖肉吃。不过当时, 咱家还不懂事。倒也没觉得怎么可怕。只是被他嗖的一下子高高举起, 总觉得有点六神无主。咱家在学生的手心稍微稳住神儿, 瞧了一眼学生的脸, 这大约便是咱家平生第一次和所谓的“人”打个照面了。当时觉得这家伙可真是怪物, 其印象至今也还记忆犹新。单说那张脸, 本应用毫毛来妆点, 却油光崭亮, 活像个茶壶。其后咱家碰上的猫不算少, 但是, 像他这么不周正的脸, 一次也未曾见过。

## 吾輩は猫である

のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぶうぶうと煙を吹く。どうも咽せばくて実に弱った。これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知った。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐っておったが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思っていると、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおった兄弟が一足も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまった。その上今までの所とは違って無暗に明るい。眼を明いていらぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は薫の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐ってどうしたらよかろうと考えて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニャー、ニャーと試みにやって見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡って日が暮れかかる。腹が非常に減って来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所まで歩こうと決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。

---

况且、脸心儿鼓得太高，还不时地从一对黑窟窿里咕嘟嘟地喷出烟来。太呛得慌，可真折服了。如今总算明白：原来这是人在吸烟哩。

咱家在这名学生的掌心暂且舒适地趴着。可是，不大工夫，咱家竟以异常的快速旋转起来，弄不清是学生再动，还是咱家自己在动，反正迷糊得要命，直恶心。心想：这下子可完蛋喽！又咕咚一声，咱家被摔得两眼直冒金花。只记得这些。至于后事如何，怎么也想不起来了。

蓦地定睛一看，学生不在，众多的猫哥们儿也一个不见，连咱家的命根子——妈妈也不知去向。并且，这儿和咱家过去呆过的地方不同，贼拉拉地亮，几乎不敢睁眼睛。哎哟哟，一切都那么稀奇古怪。咱家试着慢慢往外爬，浑身疼得厉害，原来咱家被一下子从稻草堆上摔到竹林里了。

好不容易爬出竹林，一瞧，对面有个大池塘。咱家蹲在池畔，思量着如何是好，却想不出个好主意。忽然想起：“若是再哭一鼻子，那名学生会不会再来迎接？”于是，咱家咪咪地叫几声试试看，却没有一个人来。转眼间，寒风呼呼地掠过池面，眼看日落西山。肚子饿极了，哭都哭不出声来。没办法，只要能吃，什么都行，咱家决心到有食物的地方走走。咱家神不知鬼不晓地绕到池塘的右侧。实在太艰苦。



そこを我慢して無理やりに這って行くとようやくの事で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這入ったら、どうにかなると思って竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れのである。一樹の蔭とはよく云ったものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になっている。さて邸へは忍び込んだもののこれから先どうして善いか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降って来るといふ始末でもう一刻の猶予が出来なくなった。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考えるとその時はすでに家の内に這入っておったのだ。ここで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に逢ったのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いやこれは駄目だと思ったから眼をねぶつて運を天に任せていた。しかしむじいのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て台所へ這い上った。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上っては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになった。この間おさんの三馬を偷んでこの返報をしてやってから、やっと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといいながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けて

---

咬牙坚持，硬是往上爬。真是大喜，不知不觉已经爬到有人烟的地方。心想，若是爬进去，总会有点办法的。于是，咱家从篱笆墙的窟窿穿过，窜到一户人家的院内。缘份这东西，真是不可思议。假如不是这道篱笆墙出了个洞，说不定咱家早已饿死在路旁了。常言说得好：“前世修来的福”嘛！这墙根上的破洞，至今仍是咱家拜访邻猫小花妹的交通要道。且说，咱家虽然钻进了院内，却不知下一步该怎么办才好。眨眼工夫，天黑了。肚子饿，身上冷，又下起雨来，情况十万火急。没法子，只得朝着亮堂些、暖和些的地方走去。走啊，走啊……今天回想起来，当时咱家已经钻进那户人家的宅子里了。在这儿，咱家又有机会与学生以外的人们谋面。首先碰上的是女仆。这位，比刚才见到的那名女生更蛮横。一见面就突然掐住咱家的脖子，将咱家摔出门外。咳，这下子没命喽！两眼一闭，一命交天吧！然而，饥寒交迫，万般难耐；乘女仆不备，溜进厨房。不大工夫，咱家又被摔了出去。摔出去，就再爬进来；爬进来，又被摔出去。记得周而复始，大约四五个回合。当时咱家恨透了这个丫头。前几天偷了她的秋刀鱼，报了仇，才算出了这口闷气。当咱家最后一次眼看就要被她摔出手时，“何事吵嚷？”这家主人边说边走上前来。女仆倒提着咱家冲着主人说：

## 吾輩は猫である

この宿なしの小猫がいくら出しても出しても御台所へ上って来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を擦りながら吾輩の顔をしばらく眺めておったが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這入ってしまった。主人はあまり口を開かぬ人と見えた。下女は口惜しそうに吾輩を台所へ振り出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に這入ったぎりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思っている。当人も勉強家であるかのごとく見せている。しかし実際はうちのものがいうような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく昼寝をしている事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたらしている。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらわしている。その癖に大飯を食う。大飯を食った後でタカジャスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は友達が来る度に何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものには甚だ不人望であった。

---

“这只野猫崽子，三番五次摔它出去，可它还是爬进厨房，烦死人啦！”主人捧着鼻下那两撇黑胡，将咱家这副尊容端详了一会儿说：“那就把它收留下吧！”说罢，回房去了。主人似乎是个言谈不多的人，女仆气哼哼地将咱家扔进厨房。于是，咱家便决定以主人之家为自家了。

主人很少和咱家见上一面。职业嘛，据说是教师。他一从学校回来，就一头钻进书房里，几乎从不跨出门槛一步。家人都认为他是个了不起的读书郎。他自己也装得很像刻苦读书的样儿。然而实际上，他并不像家人称道的那么好学。咱家常常蹑手蹑脚溜进他的书房偷偷瞧看，才知道他很贪睡午觉，不时地往刚刚翻过的书面上流口水。他由于害胃病，皮肤有点发黄，呈现出死挺挺的缺乏弹性的病态。可他偏偏又是个饕餮客，撑饱肚子就吃胃肠消化药，吃完药就翻书，读两三页就打盹儿，口水流到书本上，这便是他夜夜雷同的课程表。

咱家虽说是猫，却也经常思考问题。

当教师的真够逍遥自在。咱家若生而为人，非当教师不可。如此昏睡便是工作，猫也干得来的。尽管如此，若叫主人说，似乎再也没有比教师更辛苦的了。每当朋友来访，他总要怨天尤人地牢骚一通。

咱家在此刚刚落脚时，除了主人，都非常讨厌咱家。

どこへ行っても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかった。いかに珍重されなかったかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍にいる事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかったからやむを得るのである。その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気の良い日は椽側へ寝る事とした。しかし一番心持の好いのは夜に入ってここのうちの子供の寝床へもぐり込んでいっしょにねる事である。この子供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入って一間へ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間に己れを容るべき余地を見出してどうにか、こうにか割り込むのであるが、運悪く子供の一人が眼を醒ますが最後大変な事になる。子供は一一ことに小さい方が質がわるい一一猫が来た猫が来たといって夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現にせんだってなどは物指で尻べたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を観察すればするほど、彼等は我儘なものだと断言せざるを得ないようになった。ことに吾輩が時々同衾する子供のごときに至っては言語同断である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へっついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら家内総がかりで追い廻して迫害を加える。

他们不论去哪儿，总是把咱家一脚踢开，不予理睬。他们是何地不把咱家放在眼里！只要想想他们至今连个名字都不给起，便可见一斑了。万般无奈，咱家只好尽量争取陪伴在收留我的主人身旁。清晨主人读报时，定要趴在他的后背。这倒不是由于咱家对主人格外钟情，而是因为没人理睬，迫不得已嘛！其后几经阅历，咱家决定早晨睡在饭桶盖上，夜里睡在暖炉上，晴朗的中午睡在檐廊中。不过，最开心的是夜里钻进这家孩子们的被窝里，和他们一同入梦。所谓“孩子们”，一个五岁，一个三岁。到了晚上，他们俩就住在一个屋，睡在一个铺。咱家总是在他们俩之间找个容身之地，千方百计地挤进去。若是倒霉，碰醒一个孩子，就要惹下一场大祸。两个孩子，尤其那个小的，体性最坏，哪怕是深更半夜，也高声号叫：“猫来啦，猫来啦！”于是，患神经性消化不良的主人一定会被吵醒，从隔壁跑来。真的，前几天他还用格尺狠狠地抽了咱家一顿屁股板子哪！

咱家和人类同居，越观察越不得不断定：他们都是些任性的家伙。尤其和他们同床共枕的孩提之辈，更是岂有此理！他们一高兴，就将咱家倒提起来，或是将布袋套在咱家的头上，时而抛出，时而塞进灶膛。而且，咱家若是稍一还手，他们就全家出动，四处追击，进行迫害。

## 吾輩は猫である

この間もちよつと畳で爪を磨いたら細君が非常に怒ってそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で他が頼えていても一向平気なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君などは逢う度毎に人間ほど不人情なものはないと言っておらる。白君は先日玉のような子猫を四疋産まれたのである。ところがその家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持って行って四疋ながら棄てて来たそうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戦ってこれを削減せねばならぬといわれた。一々もつとも議論と思う。また隣の三毛君などは人間が所有権という事を解していないといって大に憤慨している。元来我々同族間では目刺の頭でも鱸の膾でも一番先に見付けたものがこれを食う権利があるものとなっている。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて善いくらいのものだ。しかるに彼等人間は毫もこの観念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等のために掠奪せらるるのである。彼等はその強力を頼んで正当に吾人が食い得べきものを奪ってすましている。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持っている。吾輩は教師の家に住んでいるだけ、こんな事に関するところ両君よりもむしろ楽天である。ただその日その日がどうにかこうにか送られればよい。いくら人間だって、そういつまでも栄える事もあるまい。まあ気を永く猫の時節を待つがよかろう。

我儘で思い出したからちよつと吾輩の家の主人がこの我儘で失敗した話をしよう。

就拿最近来说吧，只要咱家在床席上一磨爪，主人的老婆便大发雷霆，从此，轻易不准进屋。即使咱家在厨房那间只铺地板的屋子里冻得浑身发抖，他们也全然无动于衷。咱家十分尊敬斜对过的白猫大嫂。她每次见面都说：“再也没有比人类更不通情达理的喽！”白嫂不久前生了四个白玉似的猫崽儿。听说就在第三天，那家寄居的学生竟把四只猫崽儿拎到房后的池塘。一古脑儿扔进池水之中。白嫂流着泪一五一十地倾诉，然后说：“我们猫族为了捍卫亲子之爱、过上美满的家庭生活，非对人类宣战不可。把他们统统消灭掉！”这番话句句在理。还有邻家猫杂毛哥说：“人类不懂什么叫所有权。”它越说越气愤。本来，在我们猫类当中，不管是干鱼头还是鲷鱼肚脐，一向是最先发现者享有取而食之的权力。然而，人类却似乎毫无这种观念。我们发现的美味，定要遭到他们的掠夺。他们仗着胳膊粗、力气大，把该由我们享用的食物大模大样地抢走，脸儿不红不白的。白嫂住在一个军人家里，杂毛哥的主人是个律师。正因为我住在教师家，关于这类事，比起他俩来还算是个乐天派。只要一天天马马虎虎地打发日子就行。人类再怎么有能耐，也不会永远那么红火。唉！还是耐着性子等待猫天下的到来最为上策吧！

既然是任情而思，那就讲讲我家主人由于任情而动的惨败故事吧。

元来この主人は何とて人に勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやって「ほととぎす」へ投書をしたり、新体詩を「明星」へ出したり、間違いだらけの英文をかいたり、時によると弓に癡ったり、謡を習ったり、またあるときはヴァイオリンなどをブーブー鳴らしたりするが、気の毒な事には、どれもこれも物になっておらん。その癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架の中で謡をうたって、近所で後架先生と渾名をつけられているにも関せず一向平気なもので、やはりこれは平の宗盛にて候を繰返している。みんながそら宗盛だと吹き出すくらいである。この主人がどういう考になったものか吾輩の住み込んでから一月ばかり後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわただしく帰って来た。何を買って来たのかと思うと水彩絵具と毛筆とワットマンという紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果して翌日から当分の間というものは毎日毎日書齋で昼寝もしないで絵ばかりかいている。しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。当人もあまり甘くないと思ったものか、ある日その友人で美学とかをやっている人が来た時に下のような話をしているのを聞いた。

「どうも甘くかけないものだね。人を見ると何でもないようだが自ら筆をとって見ると今更のようにむずかしく感ずる」これは主人の述懐である。なるほど詐りのない奴だ。彼の友は金縁の眼鏡越しに主人の顔を見ながら、

原来，我家主人没有一点比别人高明的地方，但他却凡事都爱插手。例如写俳句往《杜鹃》投稿啦，写新诗寄给《明星》啦，写错乱不堪的英语文章啦；有时醉心于弓箭，学唱谣曲，有时还吱吱嘎嘎地拉小提琴。然而遗憾的是，样样都稀松平常。偏偏他一干起这些事来，尽管害胃病，却也格外着迷，竟然在茅房里唱谣曲，因而邻里们给他起了个绰号——“茅先生”。可他满不介意，一向我行我素，依然反复吟道：“吾乃平家将宗盛是也。”人们几乎笑出声来，说：“瞧呀，原来是宗盛将军驾到！”

这位主人不知打的什么主意，咱家定居一个月后，正是他发薪水那天，他拎着个大包，慌慌张张地回到家来。你猜他买了些什么？水彩画具、毛笔和图画纸，似乎自今日起，放弃了谣曲和俳句，决心要学绘画了。果然从第二天起，他好长时间都在书房里不睡觉，只顾画画。然而，看他画出的那些玩艺儿，谁也鉴别不出究竟画的是些什么。说不定他本人也觉得画得太不成样子，因此有一天，一位搞什么美学的朋友来访，只听他有如下述一番谈话：

“我怎么也画不好。看别人作画，好像没什么了不起，可是自己一动笔，才痛感此道甚难哪！”

这便是主人的感慨。的确，此话不假。

主人的朋友透过金边眼镜瞧着他的脸说：

## 吾輩は猫である

「そう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像ばかりで画がかける訳のものではない。昔<sup>むかし</sup>以太利<sup>イタリア</sup>の大家アンドレア・デル・サルトが言った事がある。画をかくなら何でも自然その物を写せ。天に星辰<sup>せいしん</sup>あり。地に露華<sup>ろうか</sup>あり。飛ぶに禽<sup>とり</sup>あり。走るに獸<sup>けもの</sup>あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉<sup>かんあ</sup>あり。自然はこれ一幅<sup>いっくわつ</sup>の大活画なりと。どうだ君も画らしい画をかこうと思うならちと写生をしたら」「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいった事があるかい。ちっとも知らなかった。なるほどこりゃもつともだ。実にその通りだ」と主人は無暗<sup>むやみ</sup>に感心している。金縁<sup>きんえん</sup>の裏には嘲けるような笑が見えた。

その翌日吾輩は例のごとく椽側<sup>えんがわ</sup>に出て心持善く昼寝<sup>ひるね</sup>をしていたら、主人が例になく書齋<sup>しよざい</sup>から出て来て吾輩<sup>わが輩</sup>の後ろで何かしきりにやっている。ふと眼が覺めて何をしているかと一分<sup>いちぶ</sup>ばかり細目に眼をあけて見ると、彼は余念もなくアンドレア・デル・サルトを極<sup>きよく</sup>め込んでいる。吾輩はこの有様を見て覚えす失笑するのを禁じ得なかった。彼は彼の友に擲<sup>な</sup>げられたる結果としてまず手初めに吾輩を写生しつつあるのである。吾輩はすでに十分<sup>じゅうぶん</sup>寝た。欠伸<sup>あくび</sup>がしたくてたまらない。しかしせつかく主人が熱心に筆を執っているのを動いては気の毒だと思つて、じつと辛<sup>しん</sup>棒<sup>ぼう</sup>しておつた。彼は今吾輩の輪廓<sup>りんがく</sup>をかき上げて顔のあたりを色彩<sup>しきさい</sup>っている。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘<sup>じやうじやう</sup>の出来ではない。背といい毛並<sup>けいと</sup>といい顔の造作<sup>ぞうさく</sup>といいあえて他の猫に勝るとは決して思つておらん。しかしいくら不器量<sup>ふきりやう</sup>の吾輩でも、今吾輩の主人<sup>しゆじん</sup>に描<sup>か</sup>き出されつつあるような妙な姿とは、どうしても思われぬ。

---

“是呀，不可能一开始就画得好嘛。首先，不可能单凭坐在屋子里空想就能够画出画来，从前意大利画家安德利亚曾说：‘欲作画者，莫过于描绘大自然。天有星辰，地有露华；飞者为禽，奔者为兽；池塘金鱼，枯木寒鸦。大自然乃一巨幅画册也。’怎么样？假如你也想画出像样的画来，画点写生画如何？”

“噢？安德利亚说过这样的话？我还一点都不知道哩！不错，说得对，的确如此！”

主人佩服得五体投地。而他朋友的金边眼镜里，却流露出嘲弄的微笑。

翌日，咱家照例去檐廊美美地睡个午觉。不料，主人破例踱出书房，在咱家身后不知干什么，没完没了。咱家蓦地醒了。为了查清主人在搞什么名堂，眼睛张开一分宽的细缝。嗨！原来他一丝不苟地采纳了安德利亚的建议。见他这般模样，咱家不禁失声大笑。他被朋友奚落一番之后，竟然拿咱家开刀，画起咱家来了。咱家已经睡足，要打呵欠，忍也忍不住。不过，姑念难得主人潜心于握管挥毫，怎能忍心动身？于是，强忍住呵欠，一动不动。眼下他刚刚画出咱家的轮廓，正给面部着色。坦率地说，身为一只猫，咱家并非仪表非凡，不论脊背、毛楂还是脸型，绝不敢奢望压倒群猫。然而，长相再怎么丑陋，也想不至于像主人笔下的那副德行。

第一色が違う。吾輩は波斯産の猫のごとく黄を含める淡灰色に漆のごとき斑入りの皮膚を有している。これだけは誰が見ても疑うべからざる事実と思う。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ褐色でもない、さればとてこれらを交ぜた色でもない。ただ一種の色であるというよりほかに評し方のない色である。その上不思議な事は眼がない。もっともこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが眼らしい所さえ見えないから盲猫だか寝ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでもこれではしようがないと思った。しかしその熱心には感服せざるを得ない。なるべくなら動かずにおってやりたいと思ったが、さっきから小便が催している。身内の筋肉はむずむずする。最早一分も猶予が出来ぬ仕儀となったから、やむをえず失敬して両足を前へ存分にして、首を低く押し出してあーあとななる欠伸をした。さてこうなって見ると、もうおとなしくしていても仕方がない。どうせ主人の予定は打ち壊わしたのだから、ついでに裏へ行って用を足そうと思ってのそのそ這い出した。すると主人は失望と怒りを掻き交ぜたような声をして、座敷の中から「この馬鹿野郎」と怒鳴った。この主人は人を罵るときは必ず馬鹿野郎というのが癖である。ほかに悪口の言いようを知らないのだから仕方がないが、今まで辛抱した人の気も知らないで、無暗に馬鹿野郎呼わりは失敬だと思う。それも平生吾輩が彼の背中へ乗る時に少しは好い顔でもするならこの漫罵も甘んじて受けるが、

不说别的，颜色就不对。咱家的毛是像波斯猫，浅灰色带点黄，有一身斑纹似漆的皮肤。这一点，我想，任凭谁看，也是不容置疑的事实。然而，且看主人涂抹的颜色，既不黄，也不黑；不是灰色，也不是褐色。照此说来，该是综合色吧？也不。这种颜色，只能说不得不算是一种颜色罢了。除此之外，无法评说。更离奇的是竟然没有眼睛。不错，这是一幅睡态写生画嘛，倒也没的可说。然而，连眼睛应该拥有的部位都没有，可就弄不清是睡猫还是瞎猫了。咱家暗自思付：再怎么学安德利亚，就凭这一手，也是个臭笔！然而，对主人的那股子热忱劲儿，却不能不佩服。咱家本想尽量纹丝不动，可是有尿，早就憋不住了。全身筋肉胀乎乎的，已经到了刻不容缓的地步。不得已，只好失陪。咱家双腿用力朝前一伸，把脖子低低一伸，“啊”的打了一个好大的呵欠。且说这么一来，想文静些也没用了。反正已经打乱主人的构思，索性趁机到房后去方便一下吧！于是，咱家慢条斯理地爬了出去。这时，主人失望夹杂着愤怒，在屋里骂道：“混帐东西！”主人有个习惯，骂人时肯定要骂声“混帐东西”，因为除此之外他再也知道还有什么骂人的脏话，有什么办法！不过，他丝毫不理解人家一直克制自己的心情，竟然信口骂声“混帐东西”，这太不像话。假如平时咱家爬上他的后背，他能有一副好脸子，倒也甘愿忍受这番辱骂。

## 吾輩は猫である

こっちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事もないのに、小便に立ったのを馬鹿野郎とは酷い。元来人間というものは自己の力量に慢じてみんな増長している。少し人間より強いものが出て来て窘めてやらなくてはこの先どこまで増長するか分らない。

我儘もこのくらいなら我慢するが吾輩は人間の不徳についてこれよりも数倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪ばかりの茶園がある。広くはないが瀟洒とした心持ち好く日の当る所だ。うちの子供があまり騒いで楽々昼寝の出来ない時や、あまり退屈で腹加減のよくない折などは、吾輩はいつでもここへ出て浩然の気を養うのが例である。ある小春の穏やかな日の二時頃であったが、吾輩は昼飯後快よく一睡した後、運動かたがたこの茶園へと歩を運ばした。茶の木の根を一本一本嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒してその上に大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の近づくのも一向心付かざるとく、また心付くも無頓着なるとく、大きな躰をして長々と体を横へて眠っている。他の庭内に忍び入りたるものがかくまで平気に睡られるものかと、吾輩は窃かにその大胆なる度胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黒猫である。わずかに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛げかけて、きらきらする柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出さずように思われた。彼は猫中の大王とも云うべきほどの偉大なる体格を有している。吾輩の倍はたしかにある。

---

可是，对咱家方便的事，没有一次他能痛痛快快地去做。人家撒尿，也骂声混蛋，嘴有多损！原来人哪，对于自己的能量过于自信，无不妄自尊大。如果没有比人类更强大的动物出现，来收拾他们一通，真不知今后他们的嚣张气焰将发展到何等地步！

假如人类的恣意妄为不过如此，也就忍了吧！然而，关于人类的缺德事，咱家还听到不少不知比这更凄惨多少倍的传闻哪。这家房后，有个一丈见方的茶园，虽然不大，却是个幽静宜人的向阳之地。每当这孩子吵得太凶、难以美美地睡个午觉，或是百无聊赖、心绪不宁时，咱家总是去那里，养吾浩然之气，这已成为惯例。

那是个十月小阳春的晴和之日，下午两点钟左右，咱家用罢午餐，美美地睡了一觉，然后做室外运动，顺脚来到茶园。咱家在树根上一棵棵地嗅着，来到西侧的杉树篱笆墙时，只见一只大黑猫，硬是压倒枯菊而酣然沉睡。它似乎一直没有察觉咱家已经走近；又仿佛已经察觉却满不在乎，依然响着浓重的鼾声，长拖拖地安然入梦。有猫擅自闯进院落，居然还能睡得那么安闲，这不能不使咱家对它的非凡胆量暗暗吃惊。它是一只纯种黑猫。刚刚过午的阳光，将透明的光线洒在它的身上，那晶莹的茸毛之中，仿佛燃起了肉眼看不见的火焰。他有一副魁伟的体魄，块头足足大我一倍，堪称猫中大王。



吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して余念もなく眺めていると、静かなる小春の風が、杉垣の上から出たる梧桐の枝を軽く誘ってばらばらと二三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はかっとその真丸の眼を開いた。今でも記憶している。その眼は人間の珍重する琥珀というものよりも遙かに美しく輝いていた。彼は身動きもしない。双眸の奥から射るとき光を吾輩の矮小なる額の上にあつめて、御めえは一体何だと云った。大王にしては少々言葉が卑しいと思ったが何しろその声の底に犬をも挫しぐべき力が籠っているので吾輩は少なからず恐れを抱いた。しかし挨拶をしないと険呑だと思ったから「吾輩は猫である。名前はまだない」となるべく平気を装って冷然と答えた。しかしこの時吾輩の心臓はたしかに平時よりも烈しく鼓動しておった。彼は犬に輕蔑せる調子で「何、猫だ？猫が聞いてあきれらあ。全てえどこに住んでるんだ」随分傍若無人である。「吾輩はこの教師の家にいるのだ」「どうせそんな事だろうと思った。いやに瘠せてるじゃねえか」と大王だけに氣焰を吹きかける。言葉付から察するとどうも良家の猫とも思われぬ。しかしその着切つて肥満しているところを見ると御馳走を食ってるらしい、豊かに暮しているらしい。吾輩は「そう云う君は一体誰だい」と聞かざるを得なかつた。「己れあ車屋の黒よ」昂然たるものだ。車屋の黒はこの近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。

咱家出于赞赏之意、好奇之心，竟然忘乎所以，站在它面前，凝神将它打量。不料，十月静悄悄的风，将从杉树篱笆探出头来的梧桐枝轻轻摇动，两三片叶儿纷纷飘落，在枯菊的花丛上。猫大王忽地圆眼怒睁。至今也还记得，它那双眼睛远比世人所珍爱的琥珀更加绚丽多采。它身不动、膀不摇，发自双眸深处的炯炯目光，全部集中在咱家这窄小的脑门说：“你他妈的是什么东西！”

身为猫中大王，嘴里还干不干净的！怎奈它语声里充满着力量，狗也会吓破胆的。咱家很有点战战兢兢。如不赔礼，可就小命难保，因而尽力故作镇静，冷冷地回答说：“咱家是猫。名字嘛……还没有。”不过此刻，咱家的心房确实比平时跳动得剧烈。

猫大王以极端蔑视的腔调说：“什么？你是猫？听说你是猫，可真吃惊。你究竟住在哪儿？”他说话简直旁若无人。

“咱家住在这里一位教师的家中。”

“料你也不过如此！有点太瘦了吧？”

大王嘛，说话总要盛气凌人的。听口气，它不像个良家之猫。不过，看它那一身肥膘，倒像吃的是珍馐美味，过的是优裕生活。咱家不得不反问一句：“请问，你发此狂言，究竟是干什么的？”它竟傲慢地说：“俺是车夫家的大黑！”

车夫家的大黑，在这一带是家喻户晓的凶猫。